帝京大学経済学部地域経済学科

地域で活躍する卒業生

目　次

■　地域で活躍する卒業生シリーズについて　学科長　玉　真之介　Ｐ１

■　〔No.1〕野球部長として母校を１６年ぶりの甲子園へ
第６期生　瀧田　湧さん　Ｐ２

■　〔No.2〕地域を引っ張るリーダーをめざして！
第２期生　橋本　賢太さん　Ｐ６

■　〔No.3〕地域課題の解決のために企画力で勝負する！
第５期生　関谷　奏和さん　Ｐ９

■　学修ポートフォリオを活用しよう！　P12

vol.1

地域で活躍する卒業生シリーズについて

帝京大学経済学部地域経済学科
学科長　　玉　真之介

帝京大学経済学部地域経済学科は、東日本大震災の年の2011年４月に、経済学部の４番目の学科として開設されました。開設の趣旨は、言うまでもなく、東京一極集中と地方の衰退が進む日本の経済・社会の流れを少しでも変えるために、地域の活性化に貢献できる人材を育成することです。本学科が経済学部の他の学科がある東京都八王子市ではなく、理工学部ある栃木県宇都宮市に設置された理由も、この開設の趣旨にあります。

この趣旨に合わせて本学科は、経済だけではなく、行政や産業についても学べる教育カリキュラム、さらに少人数教育とフィールドワークを目玉として人材育成に取り組み、はや10年以上が過ぎました。この間、2015年に第１期生を社会に送り出し、その後毎年、高い就職率を維持し、2024年３月には第10期生を社会に送り出すことになります。

そのような節目に向け、本学科では受験生や在学生にとってロール･モデルとなるような、地域で活躍する卒業生から話を聞くことにして、様々な分野で活躍する卒業生からインタビューを開始しました。この小冊子は、そうしたシリーズの第１弾です。この冊子には、収録した３名の卒業生は、いずれも本学科の開設の趣旨を体現した人材として、地域で活躍しています。

私たちは、この３名のような卒業生を社会に送り出せたことを誇りに思います。と同時に、もっと多くの卒業生からインタビューを続けて、第２弾、第３弾を出して行きたいと考えています。本学科の在学生のみなさん、本学科への受験を目指すみなさん、こうした先輩から良い刺激をもらって、自らの学びの充実やライフデザインに活かしてください。

野球部長として母校を16年ぶりの甲子園へ

2020年３月卒業：地域経済学科第６期生
文星芸大附属高等学校教諭
瀧田　湧 さん

聞き手：玉真之介（学科長）・古家正暢（教職担当教員）

1　現在の仕事、やりがい

学科長：この度は、甲子園出場おめでとうございます。
瀧田：ありがとうございます。16年ぶり11回目の出場となりました。
学科長：16年ぶりはすごい。でも、すでに11回目なのですね。
瀧田：ええ、前身の宇都宮学園から通算で11回目になります。
学科長：歴史ある学校なんですね。戦前からの。
瀧田：そうです。創立百年以上になります。
学科長：それでは、現在の教員としての仕事と野球部長としての仕事についてご紹介ください。
瀧田：まず、教員の方から。いまは２年生の担任をしています。今年で４年目になりますが、４年連続で担任をさせてもらっています。教科としては、地歴・公民、それに地理Aとか世界史探究とか、歴史総合とか、いろんな教科を担当しています。
学科長：なかなか大変ですね。教員になる前に想像していたことと違いはありますか。
瀧田：想像して以上に、教師の仕事が多いことですかね。様々なところに気を配っておく必要がりますね、生徒も様々ですから。その中でも、卒業したとき、進級したときに、「先生のおかげで卒業できました、進級できました」とか言われるので、そこにやりがいを感じますね。最初の年が３年生の担任で、１年間だけでしたが、卒業の時は、グッとくるものがありました。
学科長：野球部との関わりも１年目から？
瀧田：そうですね。最初はコーチとして、途中から部長として、今年が２年目になります。
学科長：こんな若い部長は珍しいでしょう。
瀧田：はい、県内では一番若いです。甲子園に行ったときも、自分が一番若いだろうと思って、これは取材されるかなと思っていたら、まさか自分より若い人が居て、残念ながらでした。
学科長：それは惜しかった。ところで、瀧田さんは、野球はいつから？
瀧田：小学校２年生ですかね。学童野球で、父親がコーチだったので。中学校はクラブチームで、高校は文星に進んで、３年間やって燃え尽きたって感じです。最後の夏は作新に負

けていたので、何とかリベンジしたかったのですが、昨年の秋も、今年の春も作新に負けていたので、今回が３度目の正直で勝つことが出来ました。

学科長：16年ぶりは凄いね。栃木と言えば作新って感じでしたものね。そうとう反響が大きかったのではないですか。

瀧田：８年連続、作新でしたから。OBを中心に、多くの方から祝電や寄付、現地での応援をいただきました。反響は大きかったです。

学科長：部員数は何人くらい居るのですか。

瀧田：90名です。いま３年生が抜けて62人かな。県内では一番部員数が多いです。

学科長：そんなにたくさん。それじゃあ、レギュラーになれない部員も多いから、大変だよね。

瀧田：そうです。でも、メンバー外がしっかりしているチームほど強いと思うので、メンバー外が腐っちゃうと、メンバーにも影響するし、いまの３年生は、チームのために、メンバーのために、という意識がメンバー外に強かったので、そこが甲子園につながったと思います。

学科長：チームをそういう方向に持っていくのにはどうしているのですか。

瀧田：今年は居なかったのですが、これまでなげやりになる生徒もいたので、その時は２人で話し合ったりします。その子、その子で、良いところもあり、悪いところもあるので、やはり良いところを褒めてあげるとかします。やはり、今は褒めて伸びるのかなと思っていて、怒るとシュンとなっちゃう子が多いので、できるだけ褒めて、でも悪いところはしっかり叱って、というようにやってます。

2　大学での学びで役立っていること

学科長：そんな中で、地域経済学科での４年間の学びで役立っていることはありますか。

瀧田：途中から古家先生がいらして、それ以前はPCを使うことが少なかったのですが、古家先生にスライドを使って授業を作ることを教わって、それで教育実習の時にもパワーポイントを使って実際に授業をしましたし、いまでもスライドを使う授業をしています。それが今でも役立っていますし、古家先生に学んで良かったと思っています。

学科長：ゼミはどこに所属していたのですか。

瀧田：はじめは、松尾先生、そのあと内貴先生でした。やはりそこでは、古家先生もそうでしたけど、地域のために自分が出来ることは何か考えることを学んで、その延長線上で、広島の豪雨災害支援のボランティアに参加させてもらって、そのことが現在でも授業の中でその体験を話したりできるので、ほんとに良かったと思っています。

学科長：あの広島の豪雨災害ね。広島はでも遠いよね。１人で？

瀧田：いや同級生の清岡君と２人で行きました。呉市ですね。土砂が家の中まで堆積していて、それをバケツリレーで外に出す作業しました。それが貴重な経験になっています。

3　学生時代の想い出

学科長：ほかに学生時代の思い出は何かありますか。

瀧田：松尾先生のゼミで、金沢に観光というか、いえ、学びに行きまして、金沢は初めて行ったところなので、すごく印象に残っています。

学科長：そう、松尾先生はけっこう遠いところへフィールドワークに行きますからね。

瀧田：ええ、そこで空間の使い方とか、いろいろ学びましたね。

学科長：そういうゼミでの学びは、いまの授業でも役立っていますか？

瀧田：もちろんです。体験談を踏まえるというのが、説得力にもなりますし、なにより“食いつきがいい”ですね。ですので、できる限り、授業で使うようにしています。

学科長：学生時代に野球は？

瀧田：学生時代は、部に所属してはいなくて、昔の仲間と草野球でしたね。

学科長：そうでしたか。この地域経済学科を選んだのはどうして？

瀧田：ええ、小さい頃から歴史が好きで、特に戦国時代が好きで、なので社会の先生になれるというのが、選んだ理由の１つでしたし、あと担任の先生が帝京大学出身と言うこともあって薦めて頂いて、オープンキャンパスにも来て、キャンパスの雰囲気も良いし、「地域」というのも自分に合ってるなと思い、この学科に入学しました。

学科長：奥様とはいつどこで（笑）？

瀧田：えーと、卒業後ですね。籍を入れたのは。彼女は、佐野短期大学なんですよ。野球つながりで、彼女も別の高校なんですけど、野球部のマネージャーをやっていたので。学生時代に付き合いがあって、卒業後すぐに結婚しました。彼女も福祉系で働いていて、２人とも忙しくで２人の時間がちょっと少ないのが悩みといえば悩みです。

4　後輩への助言、これからの夢

学科長：いまの仕事は結果も出ているし、充実しているよね。

瀧田：そうです。やりがいもあるし、充実していると思います。

学科長：どうですか。後輩や、これからこの学科に入学してくる人に対して、何か助言はないですか？

瀧田：はい、地域経済学科の先生は、１人１人丁寧に見てくれて、サポートしてくれると思うので、本当にそこがいいところだなあと思いますし、自分も教師になりたいという目標をもって入学させてもらって、途中、違う道に進んでしますかも知れないという時もあったんですけど、自分の意志を強く持つことが出来れば、夢を実現することができると思います。自分の夢を叶える環境というのは、地域経済学科に備わっていると思うので、自分も３年生の担任になったときに、県内の大学に行きたいという生徒には薦めようかなあと思っています。そのくらい、お世話になったので。

古家：内貴先生の話をしないと。

瀧田：実は内貴先生に消防署を薦められて、その気になったのですけど、両親と話す中で、

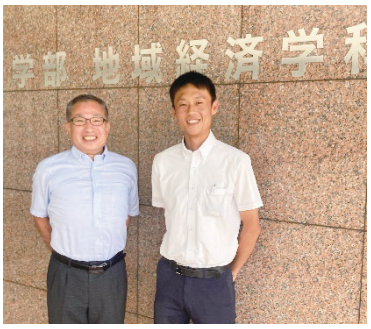
やはり最初の目標の教師を目指すことにしました。もう消防の方は決まりかけていたので、内貴先生には申し訳なかったのですけど、卒業の時に、内貴先生に「フレー。フレー」ってエールを贈ってもらえたのが今でも強い印象として残っています。

学科長：今後のプランとかありますか。

瀧田：すぐに秋季大会がはじまるので、特に関東大会が栃木県開催なので、そこで結果を出せば選抜甲子園にもつながるので、まずは２期連続の甲子園を目指してチーム一丸やっていきたいですね。さらに、夏の甲子園２年連続出場できるチームを作れるように頑張っていきたいと思います。

学科長：もうちょっと先のことで何かありますか。

瀧田：やはり、いまは野球部長として重要な役割を担っているのですけど、将来は監督として甲子園に行きたいというのが夢ですかね。文星はOBしか監督になれないので、一応、その資格はあるので、もし任せてもらえれば、自分の色のチームを作っていきたいですね。



古家先生と瀧田さん

古家：瀧田君の色とはどんな色なのかな？

瀧田：先ほども言ったように、褒めて選手を伸ばして、締めるところはしっかり締めて、そんな感じですかね。選手の長所を最大限に活かすようなチーム作りをしていければ、良いかなと思っています。

学科長：なるほど、その夢が近い将来叶うことを私たちも祈っています。今日は、ありがとうございました。

地域を引っ張るリーダーを目指して！

2016年３月卒業：地域経済学科第２期生
関東自動車株式会社 路線バス部
橋本 賢太 さん

聞き手：玉真之介（学科長）・乗川聡（指導教員）

1 現在の仕事、やりがい

学科長：お忙しい中、ご協力ありがとうございます。
橋本：いいえ、とても光栄です。
学科長：橋本さんは、何年の卒業になりますか。
橋本：2016年で第２期生になります。卒業して、ずいぶん、経ちました。早いですね。
学科長：現在のお仕事をご紹介いただけますか。
橋本：今、関東自動車の路線バス部に所属しています。路線バス全般に携わる仕事をしておりまして、主にダイヤを作ったり、お知らせなどの掲示物を作ったりしています。
学科長：ご出身はどちらですか。
橋本：栃木県の大田原市です。
学科長：関東自動車を目指された理由はありますか。
橋本：もともと小さい頃から乗り物が好きで、乗り物に直接関わる仕事がしたいと思っていました。関東自動車ですと、通学するときに使っていましたし、地域に密着している会社なので、入ろうと思いました。
学科長：なるほど、お仕事の内容も少し伺いましたが、今の仕事の「やりがい」はどんなところにありますか。
橋本：お客様に直接関わる仕事ですので、そこにやりがいがありますし、先ほど申し上げたようにダイヤを作っていますが、限られた車両とか人員とかの中で、自分の思うとおりのダイヤが出来たときはすごくうれしいですし、やりがいを感じますね。

2 大学での学びで役立っていること

学科長：そういうお仕事の中で、学生時代に学んだことで役に立っていることはありますか。
橋本：乗川先生の授業が一番役に立ったかなと思います。レポートを書くのが主の授業でしたから、就職して社会人になってからは文章を書くことがすごく多くて、大学の時にいろいろレポートを書いたのが今、役に立っていますね。
乗川：彼の文章力はもともとすごくて、他の人がＡ４で２、３枚のところを、橋本さんは10

枚以上書いてきてました。

学科長：ゼミは乗川先生以外には？

橋本：はい、最初が乗川ゼミで、３年生の時に溝尾ゼミになって、４年生の時は溝尾先生が退職となって山川ゼミでした。卒論は山川先生でした。

3　学生時代の想い出

学科長：学生時代の思い出で、印象に残っていることはありますか。

橋本：私は授業よりは、サークル活動に力を入れていたので、印象というとそっちですかね。

学科長：どんなサークル？

橋本：「まちづくり研究会」というサークルで、テーマを決めて調査をしたり、研究をしたりして、それを基に学外の発表会で発表するとかの活動をしていました。

乗川：顧問が溝口先生でしたよね。

橋本：そうです。溝口先生に文章の添削とかしていただいたりしました。

学科長：どんなテーマに取り組んだのですか。

橋本：まさしく路線バスの研究をやりまして、それが今につながっているような感じですね。

学科長：その時に関東自動車に調査に行ったりしたのですか。

橋本：はい、何回か意見交換会をやりました。

学科長：そうすると、就職活動にもなっていたのですね（笑）。

橋本：そうですね。ただ、最初は都内の会社に就職しようかと迷ったのですが、やはり地元の関東自動車に就職することにしました。

学科長：かなり充実した学生時代だったですね。

橋本：そうですね。頑張ったかなと思います。

学科長：学外の発表会とはどんな会ですか。

橋本：１つは大学コンソーシアムとちぎの発表会で、こちらでは賞をいただきました。もう一つは宇都宮市のもので、こちらは賞にはいたらなかったのですが、意外と好評でした。路線バスという身近なテーマだったので。

4　後輩への助言

学科長：路線バスは、今、人口減少とか高齢化とかで、なかなか運営が大変と言いますよね。

橋本：うちも例外では無くて、運転手が足りていない状態で、来年2024年問題といって、運転士の拘束時間が短くなるので、このままだと基準の時間を越えてしまう可能性があり、現在のダイヤで運行できなくなるかもしれません。厳しいですね。

学科長：それに対してどんな対策を考えているのですか。

橋本：ここまでくると減便せざるをえないのかなと思っていますが、減便するにしても、お客様に極力迷惑が掛からないダイヤを引いていきたいと考えています。

乗川：乗客数はどうなんですか。

橋本：乗客数はだんだん増えています。コロナの時の2020年が底で３、４割くらい減ったのですが、いま戻してきていて、コロナ前の１割から1.5割減くらいまで回復しています。このまま増えていくのではないかと考えています。

学科長：ＬＲＴの影響はどうなのですか。

橋本：駅東側の路線は大規模に再編しました。そこは影響があったのですが、今は共存共栄の時代なので、ＬＲＴとも上手く連携しながらやっていくのが一番ですかね。

学科長：後輩への助言は何かありますか。

乗川：橋本さんは林田先生の授業にゲストスピーカーで来ているので、後輩とも触れ合っていますよね。

橋本：そうなんです。今年も10月の下旬に。

学科長：どうですか。後輩たちは。

橋本：学生たちを見ると、あの時に戻りたいと強く思いますね。やはり、学生のうちにいろいろなことを経験してほしいなと思います。勉強はもちろんなんですけど、とことん遊んでほしいなとも思いますね。

5　将来の計画

乗川：橋本君は同窓会の会長ですから。

学科長：そうでしたね。今後、同窓会を少し動かそうと思っているで、よろしくお願いします。橋本さん自身の将来の計画というか、何か考えていることはありますか。

橋本：漠然としているのですが、地域のリーダーというか、地域の活性化に向けて引っ張っていくような人になりたいと思っていて。

乗川：それは宇都宮、それとも大田原市。

橋本：大田原市です。やはり生まれ育った町を元気にしたいと思いますね。

橋本君と乗川先生

学科長：もう少し具体的に言うと。

橋本：市議会議員とかにもなりたいかなと、何年後になるかわからないのですけど。

学科長：それはすごい。

橋本：今の仕事にも魅力は感じているのですが、実家が大田原市で電器屋をやっているので、いずれ実家を継いで、経営しながら地域を活性化する仕事もやっていこうかと。

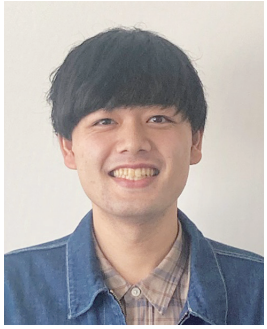
学科長：ぜひ頑張ってほしいですね。

橋本：折角、地域経済学科に入学して卒業できたので、やっぱり最終的には地域の活性化に貢献したいなと思っていますね。

乗川：橋本さんがそんな風に考えているとは思いませんでした。頼もしいですね。

学科長：ほんと頼もしいです。その計画は必ず実現できると思います。私たちも応援しています。

地域課題の解決のために企画力で勝負する！



2019年３月卒業：地域経済学科第５期生

国土交通省 北陸地方整備局（新潟市役所から出向中）
関谷 奏和 さん

聞き手：玉真之介（学科長）・乗川聡（指導教員）

1 現在の仕事、やりがい

学科長：今日はありがとうございます。少しお話聞かせてください。

関谷：私で良いのでしょうか、と思うのですが。

学科長：いや、関谷さんは本学科から県庁所在地都市の公務員に採用された第１号で、その後は宇都宮市役所はじめ毎年、うちの学科から公務員採用者が続いていますから。公務員就職のパイオニアとして話を聞かせてください。ところで、関谷さんは、何年の卒業になりますか。

関谷：平成31年ですから、2019年３月になります。卒業して今年が５年目ですかね。

学科長：現在のお仕事の概要を教えてください。

関谷：今は国に出向して、用地の買収をしています。もともとは新潟市役所に行政職として就職して、４年間はイベントだったりとか、地域課題を解決するために、企画をしたりしていました。一ヵ所目の所属は東区役所の地域課というところで何でもやる課でした。

学科長：それは、希望を出して配属されたのですか？

関谷：いえ、企画できるところ行きたいといったら、たまたま何でもやるところへ配属されました。

学科長：それはたいへんそうですが、やりがいとか、面白さとか、ありますか。

関谷：そうですね、企画が出来るので、それで人が喜んでいるところを見ることができるのと、逆に裏方の目に見えないところもどっちも経験できるのが良いですね。

学科長：その中で、一番印象に残っている仕事ってありますか。

関谷：実は、今年の２月くらいに、「自治会の後継者不足」という新潟だけではなく、全国どこでも深刻な課題を担当することになってしまって。よくやるチラシとか配っても残らないし、それで回覧板にその問題を書いて回してください、全世帯に回したら、すごい反響があって、それが一番達成感のあった仕事かな、と思います。見本を持ってくれれば良かったんですけど。

学科長：自ら企画したことが多くの人に受けとめられたわけだから、それはいいですね。

2　大学での学びで役立っていること

学科長：関谷さんは、大学入学したときから公務員を目指していたのですか。

関谷：まず、新潟に戻って新潟で仕事がしたいとうのが一番。そう考えると、親も公務員なので、市役所で働くのがワーク･ライフバランスからもいいのかなと思って。

学科長：若いときはどうしてもね。でも、公務員試験となると特別の勉強が必要じゃないですか。学生時代はどうしていたのですか。

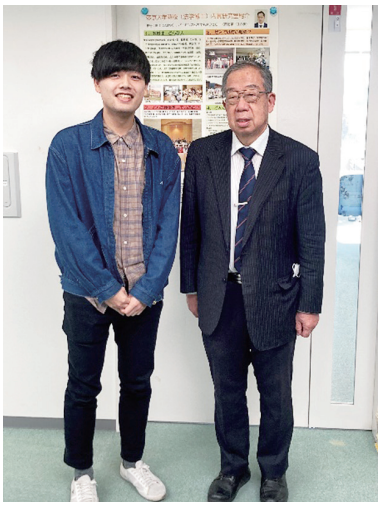
関谷：それは、乗川先生とか内貴先生とか、他の先生にも、公務員になりたいんですけど、どんな勉強をしたらいいですか、と聞いて、いろんな方面からアドバイスをいただいて、自分の中でその意志を固めていきました。この学科は自由度があって、公務員対策の勉強をする時間もとれたと思います。

乗川：確かに関谷君の場合は、その場にあるいろんなものを自分から利用して、主体的に学んでいたので、その姿勢を身につけたことが今の仕事にも役立っているのじゃないかな。

関谷：はい、とにかく先生達からいろんな話を聞いたのが、よかったと思います。さっきも内貴先生と話していて、やはりプロフェッショナルなんで、本当に役立つ話をいっぱいしてもらいました。

学科長：卒業後も内貴先生とは連絡取っていたの？

関谷：いえ、連絡してなかったんですけど、絶対、節目では連絡しようと思っていて、今回、結婚したので、ようやくご挨拶に来ることができました。



関谷君と内貴先生

3　学生時代の想い出

学科長：学生時代の思い出で、印象に残っていることはありますか。なんか野球をやってたとか。

関谷：あのグランドで、遊びで少しやってましたけど、学生時代は勉強でしたね。

学科長：ゼミとかの思い出はなにか。確か、２年生が乗川ゼミ、３年、４年が内貴ゼミでしたよね。

関谷：内貴先生には栃木県議会とかにつれてってもらいました。乗川先生には東京へつれてってもらって、両国国技館とか江戸博物館とかへ行って、その後に死ぬほど美味しい焼き鳥を食べさせてもらいました。

乗川：そうだったっけ。僕は関谷君の記憶は、とにかく勉強していたという印象ですね。良い成績を取るんだという。確か成績は１番を通したんだったよね。

関谷：ええ、まあ。ちょっと私は入試で失敗して落ち込んでしまってて、絶対失敗しないと思っていて、さっき乗川先生にもギラギラしてたと言われたんですけど。でも結果的にこ

こに入って本当に良かったと思いました。

学科長：そう言ってもらえるとありがたいんだけど、勉強一筋みたいな学生時代？

関谷：そういうわけでもなくて、お酒飲めないんですけど、飲み会は好きで友達とよくいってたし、そうだ、みんなでボーリングによく行ってました。

4 後輩への助言

学科長：自分の学生時代を踏まえて、後輩になにかアドバイスはありますか。

関谷：とにかく先生達といっぱいコミュニケーションを取ってほしいですね。友達とかも大事だけど、すごい先生がいっぱいいるから、恵まれた環境にいることをまず知ってほしいですね。他の大学と違って、先生との距離が近いと思うので。

学科長：そうなんですよ。そこがこの学科の特徴なんですよ。

関谷：それを最大限に活かしてほしいと思いますね。研究室の前に行列が出来るくらい。その時にはよくわかんない話をされたとしても、絶対あとあと役立つと思いますから。

学科長：確かに、最近、学生がちょっとおとなしいというか、控え目なので、在学生に伝えておきますよ。

乗川：関谷君は、さっきも言ったけど、ずば抜けていましたけど、それに見合うだけの努力を自分から積極的にやっていましたよね。そこがすごいと思います。

5 将来の計画

学科長：今後、何かやりたいことはありますか。いまは国に出向して視野が広がって、でも役所だから当然、いろいろな部署を回りながら、いろいろ体験をして、上にあがっていくという組織だから、そういう点で何かプランを持っていますか。

関谷：ずっと言ってるんですが、新潟ってすごく楽しくて良いところなんですけど、やはり栃木も同じですが、その魅力が伝わっていないので、その魅力を押し出していきたいと思うんです。特に、食べることが大好きなので、新潟の食を押し出していきたいと思っているんです。

乗川：すでに有名ではあるけど、もっと知ってほしいということね。

関谷：採用面接の時も、そればっかり言ってました。「新潟は本当に食べ物が美味しいんです」って。まだ、そういう部署で仕事はしていないんですけど、出向から戻ったら、ぜひ食べ物押しの仕事がしてみたいですね。

学科長：それは絶対いいですよね。お米やお酒も美味しいしね。

関谷：お刺身とか、海産物も美味しいんですよ。

学科長：確かに、海も山もあるから。なるほど、分かりました。食を通して、新潟の魅力を伝えて、新潟をもっと活力ある町にしたいということですね。それは良いと思います。私たちも応援していますので、頑張ってください。

関谷：ありがとうございます。伴侶も出来ましたので、これまで以上に頑張りたいと思います。

学修ポートフォリオを活用しよう！

そもそも「ポートフォリオ」ってなに？

ポートフォリオ（portfolio）は、『ジーニアス英和大辞典』によれば、元々イタリア語で、「書類ばさみ」、「代表作品選集」、「有価証券明細表」といった意味とあります。

就活で使われるポートフォリオ

就活で企業から「ポートフォリオを提出してください」と言われることがあります。これは「あなたの実力や力量がわかる作品集」のことで、デザイナーやクリエーター職を目指す人は、求められることが少なくありません。

教育用語としてのポートフォリオ

大学教育における「学修ポートフォリオ」の理解には、PDCA サイクルという考え方が重要になります。これは元々、製品の品質改善や環境改善の方式として P(plan)、D(do)、C(check)、A(action)というサイクルを繰り返したものが、「自己啓発」の方法としても有効と考えられて、教育現場に取り入れられるようになりました。

目指すのは自律的な学修（＝自ら目標を定める学修管理）

みなさんは、大リーグの大谷翔平選手がマンダラチャートという目標達成シートを作っていたことを知っていますか。大切なのは、自ら目標を立てること、そして、それに向かって努力し、それを自ら振り返ることです。それが自律的な学修です。

充実した大学での学びのために

大学教育は、高校までと違い、学生が自ら選択・決定することを基本としています。それなので、大学での学びが充実したものとなるかどうかは、自律的な学修ができるかどうかにかかっています。

学修ポートフォリオを活用しよう！

学修ポートフォリオは、みなさんの自律的な学修をサポートするシステムです。難しく考えることはありません。まずは、各学期に取り組みたい目標を 1 つ決めて、それができたかどうかを振り返ってみましょう。

社会人になってからも役立つ

学修ポートフォリオを活用した自律的な学修の習慣は、大学での学びの充実だけではなく、社会に出てからも大いに役立ちます。現代は、知識が日々革新されて、生涯学び続けることが求められるからです。

TEIKYO